

新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行 新美南吉記念館 〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1-10-1 Tel. 0569-26-4888 <http://www.nankichi.gr.jp>



童話作家へ続く道

二月十七日(土)、半田市市民交流センターにて、第三十五回新美南吉童話賞の表彰式を行いました。

月半ばにしては寒さも和らいだこの日。総計一五六九編の応募の中から、見事入賞を果たした受賞者十七名が、晴れやかな笑顔を見せてくれました。

年も全国から応募があったことや、遠い半田の地へ足を運んでくれた出席者へ感謝が述べられました。

そして受賞者を代表し、最優秀賞に輝いた萱野智さんかんのともにスピーチしていただきました。「子どもの頃から

式ではまず半田市教育長の挨拶の後、表彰状の授与を行いました。誇らしげに、あるいは少し恥ずかしそうに賞状を受け取る受賞者の皆さんへ拍手が送られ、それから審査員で児童文学作家の山本悦子先生が、「今年には本当に粒ぞろいの良い作品ばかりでした。その中でも最優秀賞の『コンカラドウジ』が抜きんでいました。他の作品も本当に面白かったです。時流に乗って生成AIを題材にした作品が多く、今を見ることもお話をつくるうえで大切なことなので、良い傾向だなと思いました」と総評を述べられました。

読んできた児童文学は、今の私を形作り、ゆるぎない根幹となつて私を支えてくれています。私は小学生の時からずっと児童文学作家になりたいと考えてきました。子どもたちが最初にああ文学である児童文学を、これからもずっと書き続けていられるよう精進していきます」との言葉に、南吉はじめ数々の作家から繋がれてきたバトンが見えるようでした。

続いて半田市長から、今

最後に、萱野さんの作品『コンカラドウジ』を、「南吉童話お話の会 でんでんむし」の館山典昭さんが朗読して閉式へ。受賞者の皆様、おめでとうございます。

受賞者へのインタビュー

自由創作部門最優秀賞を受賞された、萱野智さんにお話をうかがいました。



——受賞の連絡が来た時のことを教えてください。

一歳の娘と一緒にいたんですけれど、電話が終わって「入賞やって」といったら、「コンカラ」っていわれたような気がして(笑) たぶん気のせいだと思っんですけど、寝かしつけながらぶつぶついていたのが残っていたのかな、と。

——「コンカラドウジ」という存在はどのように思いつかれたのでしょうか？

最初は忘れられた妖怪の話にしようと思って、まずはビジュアルから、朴の葉っぱの顔をした妖怪を思いつきました。後はどんな妖怪にしようか、木枯らしの妖怪にしよう、木枯らし

の語感に近くて、乾いて冷たいような音が何かないかな……と考えて、名前を思いつきました。

——今話に出た朴の葉について、作中では夢と現実の世界をつなぐ、大切な役割を果たしていますよね。

何年か前、岩手の宮沢賢治記念館に行った時、裏手の坂を下っていると朴の葉が落ちていました。その時は「朴葉焼き美味しそうだな」としか思っただけだったんですけど(笑) 宮沢賢治の世界に半分浸りながら歩いてきたあの時の情景が、今回の作品につながったのかもしれない。

——キャラクターを造形するうえで工夫したことはありますか？ たえばカンタくんの「訛り」とか。

私が大阪の人間なのでカンタが喋っているのも大阪弁になったところはあると思うんですけど、関西の言葉って良くも悪くも無遠慮ですよ。相手との距離を詰めやすい言葉なのかなと思っていて、まだ親しくなかったショウジとカンタが一緒になって話をつくっていくうえで、自然とカンタ

の言葉が大阪弁になったのかもしれない。そこに標準語のショウジがいることで、転校生なのかな、カンタと同じクラスになる前も転校してきたのかなとか、そういう印象が出ればいいのかというのがあります。

——童話を書くうえで大切にしたいことはありますか？

リアリティと言葉の流れです。繰り返し声に出して読むと、詰まりや不要な言葉が見えてくるので、そういうのを取っていきましょ。ファンタジーだからこそ本当にそこにあると感じてもらうため、できるだけシンプルに、想像がしやすいように心がけています。

——創作を始められたきっかけはなんですか？

子どもの時から本当に本が好きで、物語に心揺すぶられた経験もたくさんあったので、自分でも書きたいと思うようになるのは自然なことでした。ちゃんと創作に向き合って書くようになったのは、大学を卒業してからのことです。大学の友人で絵の上手な子がいて、二人で創作ユニットを組んで、雑貨や本を作るよ

うになりました。

——最後に今後の目標をお聞かせください。

小学生の時からずっと児童文学作家になりたかったので、プロの作家になりたいです！

令和五年度『新美南吉記念館研究紀要』発行予告

毎年、記念館が発行している『研究紀要』では、新美南吉やその作品に関する研究・寄稿・資料の紹介などを掲載しています。

最新の第三十号は三月末発行予定です。その目次をお知らせします。

■ 新美南吉の著作権管理と作品使用の軌跡 (藤田のぼる)

■ 講演録「音楽でたどる新美南吉の生涯」 (加藤希史)

■ 【資料紹介】石垣藤九郎氏の絵に見る昔の岩滑 (遠山光嗣)

異聖歌亡き後、「新美南吉著作権管理委員会」が発



▲ 南吉生家を裏手から見る

足したあらましや、当時世間から南吉作品がどれほど求められていたのか、著作権管理事務の記録から紐解いていく藤田氏の『覚え書』は必見です。いかに南吉が特異な作家であったかが、著作権という切り口から伝わってきます。

講演録は、昨年開催した半田・安城連続レクチャー&コンサートの内容をまとめたものです。ほか、南吉とほぼ同年代で、南吉の生家から道を挟んだ場所に暮らしていた故石垣藤九郎氏が、当時の岩滑の街並みや風景を描いた絵八枚(例・左写真)を資料として紹介しています。

販売は記念館受付にて。ホームページで通信販売の取扱いもいたします。

南吉とわたし ②5 近代詩伝道師

Repo



この石の上を過ぎる
小鳥達よ、

しばしここに翼をやすめよ

この石の下に眠つてゐるのは、
お前達の仲間の一人だ

何かの間違ひで

人間に生れてしまつたけれど

(彼は一生それを悔ひてゐた)

魂はお前達とちつとも異らなかつた

(「墓碑銘」より)

もしも「人間」として生れてこなければ、
何に生れてきたかつたらうと、考えてみた
ことはありますか。新美南吉の詩「墓碑銘」
には、何かの間違ひで人間に「生れてしまつ
た」鳥が過酷な人間界をずたぼろになつて生
き、世を去る——その一生を労り、悼む作者
の思いがえがかれています。

童話作家としての南吉に親しんでいた私
が、この詩に出会つたのは三十代半ばの頃
だったので、まずこの「鳥の魂を持った
人間」の登場に驚き、胸をゆさぶられました。
自分も生きていく上で困難にぶつかつた
り、人を傷つけ、あるいは傷つけられた経験
があつて、そのたびに「なぜ、人間に生れて
きたんだらう」と考えてきました。たとえば、
ミミズに生れていたなら、落ち葉や土を食べ
て排泄をし、豊かな土を作る。他者を傷つけ
ることもなくすこやかに生きていけたらう
に、と。誰にも言えずにきた内心を初めて分
かつてもらえた、慈しんでもらえたように、
救われる思いがしました。

南吉の「詩」は、童話にくらべるとそこま
で知られていませんが、南吉の素直な感情や
心の動きがじかに感じられるものが多いよう
に思います。小学校の代用教員時代に書いた、
純真で心はずむような詩。失恋の痛手の渦中
で書かれた詩。かなしみや、さびしさ。風景
や人の温かさ。自然の摂理のうつくしさ。厳
しい人生のなかで、創作の喜びとその感覚を
清冽にうたつたもの。そのどれもがすつと心
に入つてきます。

そんな南吉の故郷・半田市岩滑や知多半島
周辺を初めて訪ねたのは、二〇二一年二月の
こと。実際に南吉の生れ育つた地やゆかりの
地をこの目でみて、歩き、それらの風景が作
品に生き生きと反映されていることを肌で感
じ取り、なんとも嬉しくなりました。

南吉の作品(童話・詩)には「小さき者、
弱き者、孤独な者、しいたげられし者(被差
別側)への深い共感、憐憫、慈愛の念を感
じさせるものがときに見受けられます。これ
は南吉自身がそれを自分事として体験してき
たから、ということもあるのかなと思います。
また作品において、人間はもろん、狐を
筆頭とした動物、鳥、昆虫、両生類、魚など
あらゆる生き物が主役として登場します。こ
れらには上から講釈をたれたり、教訓めいた
ことを押しつけるような作品がほとんどあり
ません。解釈は読み手に委ねられる。この多
種多様な生の痛み、喜びを心に浮かべるとき、
私たちは他者の生を想像し、生きてみるこ
とができる。真に豊かな文学のありようとい
うものを私は南吉から、教わりました。



執筆者プロフィール

1974年東京生まれ。近代詩伝道師、著述業。思潮社に在籍時は多くの詩書編纂に携わる。2008年より、詩の朗読及び伝道活動を開始。翌年から詩の読書会「ポエトリーカフェ」を主催。他著作に『心に太陽をくちびるに詩を』、インタビュー集に『一篇の詩に出会った話』。

著作紹介／『人間に生れてしまったけれど——新美南吉の詩を歩く』(かもがわ出版)

病気や失恋、就職に悩まされながら、最期まで創作の火を燃やし続けた新美南吉の生涯を、彼の詩と重ね合わせて紹介した一冊。著者が南吉のふるさとを訪ねた文学散歩記なども収録されている。



記念館からのお知らせ

新美南吉没後81年「貝殻忌」

3/20(祝)

3/24(日)

3月22日(金)、新美南吉は81回目の命日を迎えます。様々なイベントを通して新美南吉を偲びましょう。



3月22日(金)「命日」 ※入館無料

- ・「貝殻忌」式典(三谷昇 紙芝居「いつのことだか」上演(由木凜)、つばさ幼稚園園児によるうた、献花)
- ・りんりん-南吉の息吹を生きる4人のアーティスト-(朗読と音楽)
- ・蓄音機コンサート
- ・デコパージュでオリジナルウッドキーホルダーを作ろう!



由木 凜氏



キャンドルと折花



3月20日(祝)

- ・折花体験ワークショップ

3月23日(土)

- ・貝殻忌ウォーク～ガイドと歩く文学散歩～
- ・文学講座「兄さんは僕についてすべてを知ってる～南吉にとっての異聖歌～」
- ・AMI 南吉を歌う ・貝殻笛づくり

3月24日(日)

- ・蓄音機コンサート
- ・デッピングキャンドルを作ろう!
- ・歌とお話の会 ・新美南吉読書会

3月20日(祝)～24日(日)

- ・南吉クイズ(中学生以下)



十二月(師走)
▼8～10日 第76回「半田市美術展」。新美南吉生誕110年を記念し南吉賞が設けられる。於瀧上工業雁宿ホール▼16～28日「手袋を買いにの日」。館内で白銅貨を見つけた子どもに缶バッジをプレゼント。2

日誌抄

企画展 “君は即ち春を吸いこんだのだ” ～南吉のセンス・オブ・ワンダー～

南吉の自然に対する鋭く豊かな感性とそこから生まれた作品について、レイチェル・カーソンの遺作「センス・オブ・ワンダー」との共通点から紹介します。
会期 4月13日(土)～6月30日(日)



ご寄付のお礼

新美南吉顕彰基金へご寄付くださった皆さま、誠にありがとうございました。令和5年度に一万円以上のご寄付をされた方のお名前を掲載いたします。(希望者のみ・五十音順・敬称略)

- ・田中 千恵子
- ・宮島 正子
- ・みうら書店

81人参加▼17日「折花体験」。27人参加▼23・24日「えと人形に絵付けをしよう」。48人参加
一月(睦月)
▼4日 令和5年度「半田市新美南吉読書感想画コンクール」受賞作品展始まる(2月4日)▼20日 ガイドボランティア「南吉案内人」例会▼21日 企画展「詩と遊ぶ・新美南吉と知多の自然」終了。会期中観覧者数9544人▼27日「榊原澄香ペーパーアート展」始まる(4月7日)▼28日 第194回新美南吉読書会。20人参加